

庄原特別支援学校支援センターだより

～地域との共同による特別支援教育の推進～



NO. 10

平成23年2月

発行 広島県立庄原特別支援学校

電話 (0824) 72-5111

メール soudan@shobara-sh.hiroshima-c.ed.jp

『庄原特別支援学校支援センターだより～地域との共同による特別支援教育の推進～NO. 10』のページを開いていただきありがとうございます。

今号は、御相談をよくお受けすることから、個別の指導計画の作成や個に応じた教材・教具例を御紹介いたします。

第10号の内容

- 個別の指導計画の作成例
- 個に応じた教材・教具例「『を』の学習」「を」迷路」編



1 個別の指導計画の作成例

「個別の指導計画」は、障害のある幼児児童生徒一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導を行うために教育課程を具体化したものです。保護者の参画による作成と実態把握（A：Assessment）・計画（P：Plan）・実施（D：Do）・評価（C：Check）・改善（A：Action）のAPDCAサイクルの充実が重要です。

1

アセスメント（実態把握）

本人・保護者のニーズ、障害の状態・特性等

ニーズ把握



保護者の願い：用意を自分でできるようになってほしいと思います。将来一人で出かける自由が広がると思うのです。レストランで、メニューを見て、食べたいものを注文できるようになってほしいと思います。楽しみが増えると思うのです。

実態把握を行います。

●面接法（保護者や幼児児童生徒本人から直接的に情報を収集）、●行動観察法（対象となる幼児児童生徒の行動を観察し、その記録を分析）、●検査法（標準化された検査）などの方法があります。

アセスメント（実態把握）例
WISC-Ⅲ（検査）や行動観察からの分析例

- 生活場面では、言葉や抽象的概念を伝えることが中心の内容で授業が進んだり、人数が多い集団の中で言語指示を聞き取ったりする場面に困り感がある。
- 人が話したことを覚えていられず、戸惑ったり混乱する場面が生じることがある。
- 視覚的支援も、自分で判断して順序付けたりすることは苦手である。視覚的支援は、順序はあらかじめ示しておくことが、見通しが立ちやすく、達成感につながると考えられる。・・・など

2

支援会議/校内委員会など



生活の中で使う語彙を増やしたいなあ、人が多い場所では、言葉が聞き取りにくいのかなあ、行動の順番が分かれば、自主性が高まるのかなあ・・・

3

個別の指導計画作成例

個別の教育支援計画の長期目標、年間指導計画、単元計画と連動させて目標を立てます。

個別の教育支援計画長期目標

- 一人で出かけて外出ができる。
- 一人で出かける準備ができる。

個別の指導計画作成例

- 生活に結び付いた具体的な活動を、実際的な状況下で指導する。

“いつ”を明確化。

| 教科・領域名 | 学期の重点目標 | 具体的取組（支援を含む） | 学期のまとめ |
|---------|--|---|--|
| 日常生活の指導 | <ul style="list-style-type: none"> 帰りの会の前に、持ち帰るものを5個まで一人で用意できる。 登校時は、連絡帳を自分で用意できる。 | <ul style="list-style-type: none"> 持ち帰るものを1枚の準備物絵カードにリストになるようにまとめて、順序を数字と矢印で示す。 かぼんの開閉部分の裏側に、準備物絵カードが見えるように貼り付ける。 最初は、一つから始める。 本人が持ち帰りたいものをいくつかの写真から選択させリストにすることから始めて、慣れてきたら、持ち帰ってほしいものもリストに入れる。 持ち帰ったら家庭でも誉めてもらいシールを貼る。 カバンは、開閉がしやすいものにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 3個までなら、間違わずに、一人で用意できるようになった。4個目に行くことを時々忘れることがある。 かぼんの開閉部分の裏側に準備物絵カードを貼らなくても、机の上において確認できるようになった。 |
| 自立活動 | <ul style="list-style-type: none"> 三つの言葉を聞いて覚えることができる。（環境の把握） | <ul style="list-style-type: none"> 始めは、正解を掲示したカードから二者択一で選択させ、成功体験を得やすくする。 二文字の言葉から始め、五文字の言葉まで覚える。 | <ul style="list-style-type: none"> 正解を掲示したカードを見なくても答えられるようになった。 |
| 国語 | <ul style="list-style-type: none"> お出かけに必要な持ち物を3個正しく書くことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 具体物から始め、本人の生活の中で使用頻度が高いものを写真に撮り、聴き取り写真カルタを作る。 お出かけ劇を作り、ストーリーで学習する。 マジックを使い小さなホワイトボードでなぞり書きで練習した後、ノートに大きく書く練習をする。 | <ul style="list-style-type: none"> お出かけに必要な持ち物を3個正しく書くことができるようになった。 |

可能であれば数値化。

支援の有無を明確化。

客観的な評価ができるよう行動レベルで記述。

手掛かりの場所を固定。

苦手なことは目立たないように支援。

成功体験から始めて持続。

4

教材・教具のアイデアの例

- 見通しをもつことが苦手な場合は、まず、行動の順序を示す。
- 短期記憶が苦手な場合は、作業を行う手元で確認できる手がかりを置いておく。
- 成功体験から始められる教材を作成する。
- 行動の定着を図るため、複数の人が同じ行動を賞賛できるよう、課題の共有化を図る。
- 視る、聴く、操作するが同時にできるよう工夫する。
- 本人の手指の巧緻性にあったカバンや道具を用意し、自分で行うという意識が育つよう配慮する。
- 書く練習は、道具（えんぴつ、マジック、筆、クレヨンなど）の子どもを持ちやすさに配慮する。
- 書く練習は、消しやすいホワイトボードの使用など、修正への抵抗感を軽減するよう配慮する。

